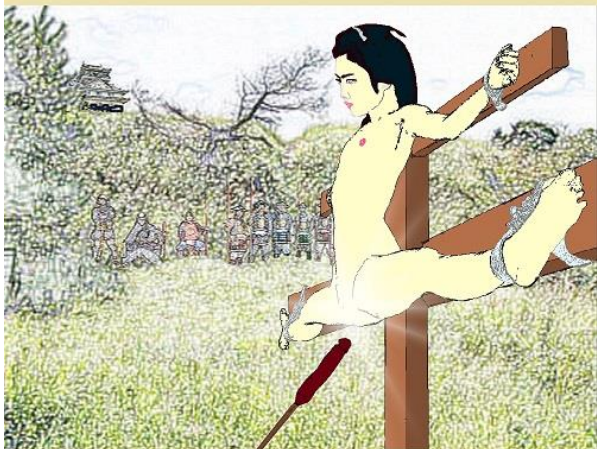


# 売姫三日晒し



濠門長恭

目次

御陣女郎	二
未通女長	九
女忍遁走	二二
一身拷責	三六
騎乗破瓜	六二
生恥磔刑	七〇
姫君無常	九二
後書き	一一〇

御陣女郎

足利將軍の權威も大いに揺らぎ、各地に戦乱の絶えない天文八年の葉月。穂が実り初めた田圃を横に、異様な集団が道を進んでいる。

先頭には若い女が二人。色も艶やかな小袖に藍染の袴、薙刀を携えている。左の女の小袖は薊の模様、右の女は桜。ともに、鬘を結わず前髪をそろえた切禿。頭には二枚の櫛を左右に並べて差している。

その後ろには、無地の小袖に足元を絞ったかるさん軽杉袴、腰に小太刀一本を差した若衆姿だが、

頭は高々と結った先を横へ広げた唐輪髻からわまげに、櫛は差していない。先を歩く二人よりは明らかに若い。稚いと形容しても過言ではない。色小姓とも春を売る妓とも見えるが、それにしては凜とし過ぎてゐる。

三人に続くのは、山ほどの荷物を背に乗せた牛が五頭と、空荷が二頭。曳いてゐるのは、先頭の二人にも負けない色小袖が八人。二十歳前はたちから、せいぜい三十を二つ三つ。頭は、まぢまぢ。女だてらに茶筌を結った者もいる。この者たちも櫛は二枚だった。

しんがり殿は先頭と同じ切禿に二枚櫛、椿模様の小袖に薙刀と袴。

数えて十二名の女ばかりだった。

やがて田圃が切れて狭い荒れ野に出る。荒れ野の向こう端には薄い陣備えが小さな山城

を取り囲んでいた。

陣から三頭の騎馬と五人の足輕が駆け出て来て、たちまちに女人の一行を取り囲んだ。

「おまえら、かような所で何をしておる。いずこへ行く」

侍大将の形をした若武者が、馬上から誰何する。仮小屋の材料から鍋釜までを牛に運ば

せているのだから、女たちはひと目で流浪の民と知れる。若武者の声は険しい。

「わたくしは、この者らの長で女郎花と申します。こたびの戦で秋元様に陣借りをお願

い致したく推参いたしました」

若衆姿が進み出て答えた。

「女の身で推参とな？」

推参とは本来、助力を頼まれもしないのに戦場に押し掛けることを謂う。勲いさおしを挙げ  
て家臣に取り立てられるのが目的である。

若武者に騎馬を寄せて、胡麻塩を頭に抱いている、この時代であればすでに老骨が、何  
事かを耳にささやいた。

「なるほど」

若武者が馬から降りて、女郎花と名乗った若い娘の間（二メートル弱）ほど前に立つ  
た。

「春をひさぐとはいえ戦場いくさばに推参するとは、それなりの覚悟もできておろくなッ！」

言うと同時に野太刀を抜いて、踏み込みながら上段に振りかぶり、真っ向から斬りつけ  
た。

「……！」

女郎花は逃げるのではなく、身体をひねりながら斜め前に踏み込んだ。

若武者が肩の高さで野太刀を絞ったとき、女郎花の右手には小太刀が握られて若武者の喉元に突きつけられていた。これも寸止め。

「わははは。おのれの身は護れるようだな」

若武者は笑いながら刀を納めた。が、次の瞬間。

「むんっ！」

抜刀と同時に長大な野太刀を片手で水平に薙いだ。先に倍する太刀の速さだった。

ガキーン！

女郎花の小太刀は、脇腹の一寸手前で止まった大剣の峰を叩いた。受けが間に合わなかったのだ。つまり、若武者の最初の一撃は小手調べ。女郎花に刀の心得があると見た二撃目は本気だったというわけだ。

「推参を許すぞ」

今度こそ太刀を鞘に納めながら、若武者が磊落に言った。

「そうだな。あの辺りに陣立てをするがよかろう」

若武者が指差したのは、本陣の後方あたりだった。

「少なくとも二十間（四十メートル弱）は、陣から隔てる。あまり近くだと、兵どもが落ち着かん」

「ありがとうございます」

女郎花も小太刀を納めると、蒼白な顔で礼を述べた。

そのとき。もうひとりの、これは豪傑を絵に描いたような騎馬武者が、まるでしなやかな虎のように——荷駄を運ぶ牛のそばに立っている茶筌髷の女に背後から忍び寄っていた。不意打ちに抱きすくめようとする。

女は女郎花にも負けない素早さで身をかわしかけたが、牛に行く手をふさがれて立ちす



くみ、そのまま捕らわれてしまった。襟元に手を差し入れられても抗わず、胸乳を揉まれるにまかせている。

「これよりは、御銭をおあしいただきますよ」

言いながら、手甲では守れぬ指の股を抓った。

「これしきで銭はやれぬが。その荷駄で小屋掛けをするのだろう。手隙の者を十人ほど貸してやつても良いぞ——構いませぬな」

最後の言葉は、若武者に向けられていた。若武者は鷹揚に頷いた。

「兵どもには、それなりの謝礼をしてやれよ。それなりの、な」

御陣女郎を知らなかったわりには、くだけた青年だった。

雑兵や人夫の手伝いもあつて、午過ぎひるに始まった小屋掛けは夕刻前に終わつた。まずは、十人の足軽たちへの謝礼を済ませてから、三つの槍小屋の戸口に蚊遣りの焚火が置かれた。もうもうと上がる煙が『見世明け』の合図だった。と同時に、出入りする者の姿を曖昧にする働きもある。

## 未通女長

ここで、この小規模な城攻めの概要を述べておこう。籠城する大野修理は、女子供を含めて二百ほど。兵の数はせいぜい百といったところか。責める秋元茂親は二百。古来、城を攻めるには三倍の兵が必要とされる。一気に力押しするなら六倍。二倍とあつては、総

掛かりでも落城はおぼつかない。

秋元家は三万石と、豪族としては大身である。その気になれば八百は兵を養える。それがわずかに二百なのは、刈り入れ時を真直に控えているからである。八百を動員すれば根城を護れないのはもちろんだが、それよりも稲の刈り手がなくなる。

だからこそ、無理押しに城を困んだのだった。大野領の新米を奪ってしまえば、来年には兵糧に事欠く。そして秋元は肥える。つまり、この戦いは翌年の決戦に備えた前哨戦だった。だからこそ、総大将には当主ではなく、嫡男の茂親が据えられている。

攻め入った側としては、稲が実り刈り入れが終わるまで居座らねばならない。だから、兵糧も軍資金も潤沢に用意されている。御陣女郎にとっては、宝の山に分け入る心地だったろう。

敵を封じ込めるのが目的とあれば、兵は暇である。夜には城からの出入りに、昼よりも

いつそうに目を光らせねばならぬので、むしろ働かされる。そして遊女にしても、高価な明かりを灯したくはない。いきおい、陽が傾いてからの二刻（四時間）ほどが稼ぎ時となる。月の障りで休む者もいるから、遊女の実数は十人ばかり。まさかに二百が押し掛けてはこないとしても、女日照りの中の慈雨とあれば、五十人から上は三つの戸口に分かれて並ぶ仕儀となる。

男たちの中には、藁で編んだ大きな袋を担いでいたり、小さな壺を抱えている者もいた。米やら塩味噌が、ときとしては銭よりも重宝される。

わいわいがやがや。男を送り出し次の男を迎え入れる遊女の姿を間近に見ながらの品定めをする連中もいる。

——雑兵どもが、一斉に固まった。御陣女郎の一行を誰何した三人の武者が、揃って出陣してきたからだだった。

雑兵を蹴散らして、三人が槍小屋の前に立った。出迎えたのは、先頭で薙刀を携えてい

たうちの一人だった。

「長は空いているか？」

いるのかではなく、空いているか。

「お生憎様。長は商いをしないんだよ。あたしじゃ駄目かい？」

女が上目遣いに若武者を見た。まさしく鼻毛を読んでいる。

「あたい、桜っていうんだ。ひとつ文字の名前は他に二人しかいないんだよ」

「そういえば、長は三文字の名だったな。意味があるのか？」

「長は格別さね。あたしらひとつ文字の妓は、色修行をたんと積んでる。蓮華とか文目つ

てふたつ文字の妓は、家を焼かれた娘とか逃散した百姓とか、地娘つてやつでさ。股をおつ広げて、はいどうぞしか取り柄がないんだね」

「では、柴田康永に絡まれた娘もひとつ文字か？」

「空木のことかい。あの妓は前からの娼売娘さ。けど、新参だからふたつ文字なんだね」

「ふうむ。女郎の寄り合い所帯にしては、仕来りがうるさそうだな」

「女郎だからさ。そんなことより、あたしを買わないのかい？」

「幾らだ？」

桜は若武者の鼻毛を読みながら、甘える声で、しかしきつぱりと告げた。

「五百文」

「馬鹿な」

若武者がのけぞった。

「儂は遊女屋を借り切るつもりなどないぞ」

この当時、女の値段は極端に安かった。五百文はともかく、桜の言う二つ文字の妓は五十文。それも戦場だからこそで、平時の街角なら十文が相場だった。普請に雇われる人足の日当の二割である。

「火が消えるまで付きっ切りで、腰巻まで脱いであいたい相對してあげるんだけど？」

平安時代あたりのやんごとなき方面は格別として。この時代に限らず江戸時代でも、娼妓といわず、性交は着衣で手早く済ませるのが普通だった。女がみずから全裸になるなど、破廉恥とか卑猥で言い表わせる行為ではなかったのである。そうまで無茶をしなければ断ち切れない過去が、女郎花を含めて、この娘たちにあったとは——いずれ物語られるであろう。

五百文どころか五十文も惜しんだのか。女郎花でなければ沽券にかかかわると思ったのか。若武者は御供の二人を引き連れて陣所へ引き揚げて行った。

槍小屋の前に活気が戻った。

三つの槍小屋のうちの二つは屏風でそれぞれ四つに区切られて、八人いるふたつ文字の

妓が一本五十文の線香を立てて、小半時刻みの商売に励んでいた。月の障りになつてゐる妓も、子種塞ぎの草を詰めれば男に分かりはしないと、しんどい身体に鞭打っている。残るひとつの小屋は、壁と同じ筵で三つに隔てられて、そのひとつでは、行列の殿に就いていた椿という女が、五百文の客を相手に素裸になつて奔放な寝技を繰り広げていた。

そして、三つの檜小屋が弧を描いて並んだ奥の、いっそう小さな小屋では、長の女郎花と桜、薊の三人が憩っているのだが。

周囲から筒抜けも同然に聞こえてくる妓たちの嬌声に、女郎花ひとりが頬を染めてうつむいている。四面楚歌ならぬ三面艶歌だった。そして、正座の習慣がない時代にあつて、女郎花は行儀よく片膝を立てて座しているが、両側に侍る桜と薊は、長に身を添わすようにして、裾を乱し脚を投げ出した横座り。三人とも袴は脱いでいるから、小屋の中もそれなりに妖しい光景ではあつた。



やがて、女郎花が腰をもじつかせて。小さな声を漏らす。

「桜、薊……妾は、もう、もう……」

みなまでは言わず。薊が横ざまに女郎花の口を吸い、胸元に手を差し入れる。立膝の裾を桜が割って、白い太腿を剥き出しにする。

「ああ……」

薊はすがりついてくる女郎花を筵の上に仰臥させて、帯に手を掛ける。前をはだけて胸乳を夕暮れの薄明に晒す。さらに下まではだけると、女郎花は腰巻を着けていなかった。代わりに、幅六寸ほどの布の両端に紐を縫い付けた、もっこ禪を着用している。これは、袴を穿かずに激しく動いたときも隠し所が露わにならぬための心得——では、ない。いずれは子を成すという女の生き方を捨てた覚悟であった。だからこそ、男ではなく女を相手に夜を過ごしている。しかし、女の生き方を捨てはしても男に成りおおすつもりもない。

年長の女に対しては受け身の一方だった。

薊と桜は立ち上がると、もっこ禪一丁の女郎花に背を向けて、手早く素裸になった。女郎花を挟んで左右に側臥して薊が女郎花と抱き合い、互いに唇を貪り胸をまさぐる。たとえ双児を生んでも存分に乳を飲ませられるだろうという豊満な薊の乳房に比して、女郎花のそれは晒布を巻けば容易に美青年に化けられるだろうくらいに小ぶりだった。薊の手が乳房から離れて女郎花の背中を抱きしめ、乳房で乳房を押し潰しこねくる。小城に攻め寄せる大軍の風情だった。

桜は体の上下を入れ替え、女郎花の片膝を腰に乗せる形となって、開かれた太腿の間に後ろから顔を突っ込み、股間に舌を這わせた。

「ひゃうんっ……」

すでに綻んでいる蕾の雌蕊めしべをくすぐられて、女郎花がしゃっくりのような悲鳴、いや嬌

声をこぼした。桜は蕾を啄ばみ、さらには音を立てて啜り、熟れた木通あけびのように口を開いている女そのものにかぶりついた。

「ああっ……里乃……いえ、桜。腰が、腰が……切ない」

「遠慮はいりませぬ。もっと乱れてよろしいのですよ、小夜姫様」

こういった妓であれば仇名を使うのは常套であるが、それにしても諱名に『姫』を付けるとは——この者たちの素性の曰いわく因縁いんねんがうかがわれる。しかし、しばらくは当人たちの名乗りのままに物語を進めていこう。

二人掛りで攻められて、しかし女郎花も受け身一方ではない。下になっている手を薊の股間へ伸ばし、もう一方の手で桜の尻を抱き寄せ下腹部を自分の上に乗せると、顔をねじって股間にむしゃぶりついた。

「あんんっ……いちだんと上達なされました。もし粗相をしましても、お赦しを」  
たちまちに桜の淫唇が、唾にとしては粘っこい汁にまみれてゆく。

股間だけを見ると、三人の年齢は逆転している。薊と桜の秘所は無毛。目を近づけて仔細に見れば、剃っていると分かる。食うに困って街角に立つ地娘はともかく。これを生業と定めた遊女は、股間の手入れに余念が無い。無毛にする者、形よく整える者。娼売道具に香を焚き込める者もいる。しかし女郎花は、早春の萌え初める風情ではあるが、これといった手入れをしていない。その萌え初めた春草も、今はしとどに濡れている。

小屋の戸口に垂らした筵むしろが、遠慮がちに持ち上げられた。

「五百のお客が、ひとり」

鼠地に黄色い蝶を古風な飛び模様に散らした小袖の前をはだけて乳房を半ばこぼした女が、言葉短く声を掛けて、すぐに引っ込んだ。

「あらま。五百文とあっちゃや、行かなくちやね」

急に蓮つ葉な口調になって、薊が三つ巴の輪から抜けて立ち上がった。どうせ脱ぐのだからと素肌すだに小袖を引つ掛け、帯を締めるのではなく巻き付けただけで、小屋から出て行った。

二人に翻弄され、乱れに乱れていた女郎花も、うっそりと身を起こす。

「今宵は、もうやめにしておきましょう。銭も稼がず痴れ事にうつつを抜かしては、皆に申し訳が立ちませぬ」

「それは料簡違いですよ」

桜も身を起こして、素裸のまま筵の上に座り直す。もっこ禪を締めて小袖を着付けにかかっている女郎花を、痴情の余韻も留めぬまっすぐな目で見つめる。

「昔のことは申しませぬが、あなたという要がおられてこそ、扇も開くというものです。

それでも心苦しいのであれば、女郎花殿は一座の用心棒とでも思し召せ」

女郎花は、かえって顔を曇らせた。

「あの武者には、まるきり太刀打ちできませなんだ」

「まさか、荒武者と一騎打ちするわけでもありませんまい」

桜、薊、椿の三人は薙刀の心得があるとはいえ、振り回してもおのれが怪我をしないと  
いうくらいの腕でしかない。しかし女郎花の小太刀なら、付け焼刃の調練を受けただけの  
雑兵など束にして軽くあしらえる。

「それは、そうですが。あれだけの器量に、あれだけの腕前となると……」

「おや。珍しくも殿方に気を惹かれましたか」

桜が、半分はからかう。

「まさかに。けれど、あの御仁。鎧の拵えから見ても、もしや総大将の秋元茂親殿ではあ  
りますまいか」

「ああ、それなら話は分かります」

桜は、先刻の素見ひやかしの一件を伝えた。寄せ手の総大将なら、女郎の総大将とでなければ一戦を交える気にならぬでしょうと——もちろん軽口であった。

## 女忍遁走

秋山勢が陣掛けをしてから半月。御陣女郎が小屋掛けをしてからでも六日が過ぎた。

槍小屋には口開けの二日目までは五十人ほどが押し寄せたが、以後は午の刻あたりから蚊遣りを焚いても、せいぜい二十人から三十人。雑兵がそうそう銭を持っているはずもないし、兵糧から何やかやをくすねるにしても、つまりは盗みである。上の立場の者は兵への示しもあって、やはり足しげくは通えないから、素裸で付きっ切りの客はせいぜい一人

が来るか来ないか。それでも、一日の水揚げはおおむね銭で数えて千五百文。女郎一人頭で百二十文なら腕の立つ大工の稼ぎさえ凌ぐから、不満はない。もつとも、淋の病をもらつたり、子流しを繰り返して身体を痛めることを考えれば、割りの良い商売ではないのだが。貧乏農民とくつついて雨の日も炎天下も地べたを這いずり回つたり、小商人の女房あきんどに納まったはいいが亭主の顔色をうかがい、挙句は近年横行している押し込みに怯えて暮らすよりは、よほど気儘に生きられるのだった。

それは、戦に狩り出された雑兵も同じかもしれない。国へ戻れば元の小百姓（の次男坊か三男坊か）だが、陣中にあるうちは米の飯にありつけるし、組頭なり侍大将なりが手柄を立てれば、おこぼれの銭をいただける。鄙ひなには稀な美女で埒を明けるといふ、夢のような一夜まで降って湧いた。



城方は知らず。寄せ手の中で苦衷を託かこっているのは、帷幕の中だけであつた。

ただ糧道を断ち、敵領内の米を奪えば良いのであるが、つまりは城を囲んで守勢にまわっているようなものだった。いっそ焼き払ってしまえば——この地を切り取っても、領民が服従まつろわぬ。

二百人で城に通じるすべての道を間道まで封じるのは、どうにも数が足りない。もちろん、小人数の出入りがあるうと、米の一俵や二俵が運び込まれようと、それくらいは大勢を傾けるには至らないのだが。

この数日、寄せ手の側が夜討ちに悩まされていた。手薄な箇所ばかりを狙つて、若干の手柄を得るとさっさと城へ引き揚げる。手足ではなくせいぜいが指先だが、それをじわりじわりともぎ取られているようなものだった。ならば城方の人数も減らしてくれようとこ

ちらが夜討ちを仕掛けると、巧妙に待ち伏せされて、またしても指の何本かをへし折られてしまふ。

初日に素見に来ただけの若武者が、今度はひとりで槍小屋を訪れた。前と同じに女郎花を所望したのだが、様子が違っていた。

「儂は秋山茂親じゃ。長と話がしたい」

買いに来たのなら追い返しもできるが、総大将として女郎の長と談判したいというのだから、これは無碍にはできない。槍小屋に三方を守られた、いわば本丸へと案内する。

椿が戸口の筵を持ち上げると茂親が先に入って、戸口をふさぐように陣取った。

「あの……」

茂親が椿を振り返る。

「儂はひとりじゃ。まさか、介添えが居らねば閨の所作もままならぬ未通女の姫君でもあ

るまいに」

女郎花が軽くうなずいて、目で椿をうながした。椿は茂親の背に黙礼をして筵を下ろした。

女郎花は総大将と向かい合つて、心を落ち着けようとしている。物の喩えとはいえ、あまりに自分の昔を言い当てられた思いだったのだ。

心が落ち着かぬうちに、茂親がずけりと核心を衝いてくる。

「おまえたちが小屋掛けをしてからこつち、どうも我らの手の内が城方に漏れておるきらい気来がある」

自分の持ち場しか見ていない雑兵は、まだ気づいていないが。あちこちの組に属する何十人という雑兵から妓たちが聞かされる寝物語は、女郎花の耳にも届いている。それらを少しく高所から望見すれば、茂親の気来は取り越し苦勞ではないように思えてくる。

「とはいえ、今さらにおまえたちを追い出すわけにもいかぬわ。兵どもが悄しよげ気て、ますます分が悪くなる」

女郎花は頭を横にも縦にも動かさず、黙って茂親の話を聴いている。何を求められているか見当がつかないのだから、首肯も反駁もできない。

「これからは、小屋の五間先に昼夜を問わず兵を立てる。この輪から外へ出るときは必ず、組頭かそれに準ずる者を同道させる」

そこで女郎花の固い顔をじろりと見て、つけ加える。

「廁であろうと野合であろうと、だぞ」

女郎花は能面をわずかに頷かせた。

「もとより、蚊に食われながら致すのを好む妓はおりません」

軽口に皮肉で返したのだが、通じたかどうか。

「寄せ手方総大将から女郎の長への申し渡しは、ここまでじゃ」

茂親は胡坐を掻いたまま、ずいと一尺余りを詰めた。

「ここからは、男と女の話じゃ。おまえは取り分けて若いし見目麗しい。五百とは言わん。一貫文でどうじゃ。見世仕舞まで付きっ切りで腰巻も取るというのを所望するぞ」

「私は身体は売りません」

女郎花は冷たい声を返した。

「私は劍の腕を妓たちに売っています。でも、秋元様の御陣では、なまく鈍らの腕など要らぬでしょう」

「ますます気に入ったぞ」

糠に釘もいいたころだった。

「そのつんとした鼻っ柱をへし折って、華奢な身体を組み敷いて、あれこれと啼かせてみ

たいものだが——どうも、女郎どもに総好かんどころか逃散されかねんな」

いちいち出向くのは面倒だから、気が変わったら昼でも夜でも本陣へ来いと言い置いて——茂親は小屋から立ち去った。

女郎花は見張の件を、すぐ全員へ伝えた。さらに付け加える。

「足輕の輪から外へ出るときは、ふたり、できれば三人から上に固まりなさい。我らの中に乱破が紛れているなど噂が立てば、今後はどこの御陣にも近づくことすらかなわぬようになりましょう」

女郎花は、あえて宙を見据えながら申し渡した。顔を見れば、どうしても空木に目が向いてしまう。

ひとつ文字の三人は言うに及ばず、ふたつ文字の八人のうち蓮華、文目、小紫、藤袴、青木の五人は一年半前に、女同士助け合い男に翻弄されずに生きようと、一座を結んだときからの仲間であるし、木蓮と菖蒲の二人は加わってから半年の余が経つ。空木だけはひ

と月前、河原に小屋掛けして、線香一本十文、付きっ切りなら百文で娼売をしていたとき。五里先にある街の楼から逃げてきた妓だ。

乱破が紛れているならおそらくは空木と。彼女が騎馬武者に抱きつかれたときの様子を、女郎花も真直に見ている。牛に行く手を遮られる前の身の躲し方は、地娘のそれではない。あるいは、咄嗟に体が動いたものの、怪しまれないために、わざと牛のいる方へ逃げたのではないかと——それは、うがち過ぎであろうが。

翌朝。またも茂親が小屋を訪れた。自堕落な妓には朝駈けもいいところだったが、さすがに女郎花は衣服を整えていた。

「今日は蚊遣りをくべるな。焚き火も狼煙もまかりならぬ」

はっと、表情を引き締める女郎花。蚊遣りの煙に細工をすれば狼煙になる。陣の手薄な方面くらいは伝えられるだろう。そのことにまったく思い至らなかつたおのれの不明を慚

じたのだった。

——その日は、午どころか巳の刻あたりから雑兵どもが門前に市を成す大商いになった。聞けば、五十からの手勢で夜討ちを掛けるという。総勢の四半分である。英気を養つておけど、夜討ちに選ばれた者には百文が下された。下手をすると（上手く行けば）百人からの客が押し寄せる。

手薬煉引いて女淫てぐすねに子種塞ほとぎの草を詰めての大童。薊、桜、椿にも客が着いたが、まさか  
かに店仕舞いまで居座る豪傑はおらず、一刻足らずで五百文は濡れ女淫に粟の大儲け。

「もう、たくさん。下の口からげっぶが出るよ」とは、二つ文字名の八人打ち揃つての感想だった。つつい本気を遣つてしまふ青木と藤袴は腰を抜かす有り様だった。

（これは一体に……？）



妓たちの戦い済んで日が暮れて。槍小屋の内からは、早々と寢息すら聞こえてくる。しかし男どもの戦は、まだ四刻も先の寅の一点。本陣の中に動きはないが、槍小屋のまわりは十人の足軽に取り囲まれている。その人配りに女郎花は、明らかかな手抜きを見ていた。

小屋から五間を隔てて囲んでいるのだから、兵の間隔は四間もある。一人おきに内と外を向いている。しかも、こちらを向いている兵の傍には篝火が置かれていた。これでは明かりに眩惑されて、闇を見透かせない。神出鬼没の乱破といわず女郎花でさえも、包囲をすり抜けるのは容易だろう。

やはり、我が手で乱破を捕まえねばならぬ。いや、捕まえても寄り手へ引き渡してはならない。乱破は絶対に口を割らぬと聞いている。となると、凄まじい拷問。そして処刑。乱破が女であれば、色責めとやらいうおぞましい仕置も加わる。

(そのような目に遭わされるくらいなら——わたくしなら自害する)

樹の根元に身を潜めた女郎花は、密かに決意を固めたのだった。

——星辰が動いて。亥の刻に掛かろうかというとき。

槍小屋のひとつで、筵がかすかに動いた。

おぼろな影が忍び出る。くすんだ赤茶色の塊は、物の怪にも見紛う。色小袖を裏返して、柿渋で染めた裏地を表に出し、白い顔と手足に灰をなすりつけた——とまでは、女郎花の潜む場所からは見て取れなかったが。

女郎花が立ち上がった。

その気配を感じて、ぎくりとふり返るくすんだ影。

「空木……ですね」

女郎花は瞬息に間合いを詰めた。腰の小太刀は抜刀している。

殺すしかない。たとえ短い間でも仲間であった者に、いや誰にせよ、業苦の死を遂げさせたくない。けれど、空木を見逃せば一座が成り立たぬ。ならば——苦しませぬようひと思いに、我が手で。

女郎花は、空木の首筋を狙って必殺の斬撃を放った。首筋の血脈を断ち切れれば、苦しむことなく即座に絶命するという。

しかし空木は身を沈めて刃を躲し、そのまま転がって横へ逃げた。

空木の忍び装束と違って、女郎花の無地とはいえ色小袖は、篝火に照らされれば闇夜に目立つ。しかも、大きな動き。さすがに見張の足軽も異変に気づく。内を向いていた五人が、駆け寄ろうとする。

空木が、女郎花にじゅうぶんな間合いを取って立ち上がる。懐から小さな玉を取り出した。

(焙烙弾！)

導火線に火を点じられぬうちにと、女郎花は地を蹴った。

不意に空木が微笑んだ。

「ありがとうね」

女郎花の殺意と真意とを読み取つての言葉だった。

空木は玉から伸びている短い紐を引き抜いた。即座に、地面に放り出す。玉はころころと転がって。

パン。

拍子抜けするほど小さな爆発音と同時に。

「あっ……?!」

いきなり真昼になったかと思つたほどの閃光が闇を切り裂いた。

閃光が消えたとき、空木の姿も消えていた。

「な、なんだ……」

「曲者だあ！」

事態をわきまえぬままに足軽が喚き交わす。

桜、薊、椿の三人が、押っ取り薙刀で駆けつける。

「あなたたちは戻りなさい」

小太刀を納めて、女郎花が三人に命じた。

「乱破を取り逃がしました。御大将へ言上に参ります。道を開けてください」  
これは、女郎花を取り囲んだ足軽に向けて。

女郎花が陣所へ向かって歩むと、気圧されたように足軽は左右へ引いた。  
篝火に照らし出された女郎花の顔は蒼白に変じている。

## 一身拷責

すでに足軽小頭からの報せを聴いている茂親は、行住坐臥に使っている本陣内の小屋

で女郎花を迎えた。鎧下を着込んでいる。着替える暇は無かつたはずだから、夜討ちの指揮を執るべく、その姿で仮眠していたのだらう。

「申し訳ありません」

女郎花は、床几に座す茂親の前に土下座した。

「何をしておる」

とは、女郎花を案内した足軽頭への叱責。

「妓どもをひっ捕らえよ」

「お待ちください」

女郎花が土下座したまま懇願する。

「乱破者を引き入れてしまったは、長であるわたくしの咎。妓たちの与り知らぬことです」

茂親は女郎花を見下ろして、次の言葉を待つ風情。

「責めは、長であるこのわたくしが一身に負います。なにとぞ、他の妓はお咎めなさ  
らぬようお願い申し上げます」

女郎花としては、こう言わざるを得ない。また、それだけの覚悟はすでに行っている。

「ならば、立て。立って素裸になれ」

打てば響くような茂親の言葉。とつくに、女郎花への処置を決めていたとしか思えない。

「何と仰せられましたか？」

女郎花にとっては、寝耳に水。まさか、このような時に遊女を弄ぶつもりでもないだろ  
うに。

「いつまで、そこに突っ立っておる。構わぬから入れ。この妓が素裸になって詫びるとこ  
ろを、とくと見てやれ」

茂親は足輕頭に指図する形で、女郎花の反問に答えた。と同時に、新たな恥辱を付け加  
える。

「……………」

女郎花が立ち上がった。唇を噛んで茂親を睨みつけた。のは、一瞬。ふっと目から力が抜けて、両手は帯をほどきにかかった。

袴と小袖までは平然と脱げた。みずからは身体を売らぬにしても、周りの女たちが男の前でそうしているのを見ていれば、羞恥心も薄れてくる。しかし。肌襦袢に掛けた指は少しく震えていた。それでも、一気に脱ぎ捨てた。小袖のように緩やかに脱ぐだけのゆとりは失せていた。

もっこ禪の紐を摘まんだはいいが、それを引っ張ろうとしても腕が動かない。女郎花は茂親を一瞥してから足軽頭に目を流し、すぐに伏せた。人払いを——とまでは、言葉にできない。彼女が素裸になるさまを見ると、茂親が足軽頭に命じたのだから。人払いを願えば、彼の意向に逆らうことになる。

「ええい、まだるっこしい。手を背中で組め」



唐突な言葉に戸惑いながら、羞恥の極限が先延ばしにされた安堵で、女郎花は言葉に従った。しかし、それは羞恥の極限が女郎花の考えていた形より大きくなっただけだった。

「もつとしっかり——反対側の肘をつかんでおれ」

腋を引き締めて腕を重ねて。まるで見えない縄で縛られているような形に、みずからを追いつむ女郎花。

「決して手を戻すでないぞ。おい、こやつの下帯を剥ぎ取ってやれ」

足軽頭も戸惑いながら、しかし、いそいそと命に従った。

「あつ……」

すでに薄桃色に染まっていた裸身一面に、ぱあつと紅葉が散った。薊たちの手で素裸にされるのは日常茶飯であったが——見知らぬ男に禪をほどかれるのが、こんなに羞ずかしいものだとは。

「儂は途轍もなく腹を立てておる」

茂親が床几から立って、太刀類を掛けてある壁に寄った。太刀ではなく、乗馬鞭を手にした。細竹を縦に割いて漆を染ませた太糸で巻き締めてある。

「儂が何故に腹を立てておるか、分かるか？」

鞭の先を女郎花の乳首に突きつけ、ぐりぐりと押し込む。

「くっ……乱破者を逃がして、申し訳もございません」

鞭から逃れようとはせず、乳房を蹂躪されながら、女郎花が声を絞り出す。

「そうではない」

ぴしり！

鞭が薄い乳房に叩きつけられた。

「ああっ……！」

後ろへ身を引き乳房を両手でかばった。

「手を戻すなど言ったぞ。二度は言わぬ。儂の命に服せぬなら、女郎どもをまとめて処刑

してくれるわ」

女郎の逃散を厭った男が、まさかにもそのような乱暴をはたらくとは思えぬが、しかし女郎花の知っている茂親は、常の一面でしかない。激昂してどのように豹変するか、知れたものではなかった。

「無道な。妓たちに罪はありませんぬ」

「ならば、儂の命に服せ」

ぱしぱしと掌に鞭を打ちつけて、さらなる打擲を暗示する茂親。

女郎花は両腕を背中へまわして、みずからを見えない縄で縛った。

「儂が腹を立てておるのはな——おまえが乱破を見つけたからじゃ」

「……………?」

鞭が左の乳房に擬せられる。女郎花は唇をきつく嚙むが、逃げようとはしない。

「トウセイゲキセイの計を台無しにしてくれた。夜討ちは取り止めにせざるを得んわ」

ぴしいっ！

いっそう強い一撃が乳房に叩きつけられた。伏せた腕ほどもない乳房がひしゃげて、ぶるんと跳ね返った。

「ぐっ……」

女郎花は悲鳴を呑み込んだ。

「乱破は夜討ちを城へ報せるであろうが、おまえの横槍で、我らがそれを知っていると城方が考えるのは明らかじゃ」

三発目が右に叩きつけられる。

「我らが手立てを変えると、城方は考える。追手門に兵の大半を集めはしまい——もそつと脚を開け」

鞭を片手にそのような命を發するのだから、意図は明白。しかし従わねば、ほんとうに遊女をまとめて処刑しかねないと、女郎花は判断した。人質の価値がなくなれば大名の姫

君でさえ、簡単に処刑される。賤しい遊女の命など、塵芥ちりあくたも同然だ。

女郎花は目をつむって、一尺ほども脚を開いた。女淫を夜の気が撫でる。

「おっしやられる意味が、分かりませぬ」

恐怖を紛らわせようという無意識が、女郎花に問いを発せさせた。丁寧な言葉遣いになったのは——遊女の長として振る舞う裕りを失い昔の地が顕われている。

「ふん……」

茂親は鞭の先で臍をつつき、肌を這わせて花芽に達するや、ぴんつと下へ撥ねてから手首を返した。

ぴしりと、鞭が女芯を打ち据える。

「ひいっ……」

女郎花は悲鳴を殺し切れなかった。が、後ろに組んだ腕は動かさなかった。

「東に声を発し、西に敵を撃つ。即ち東声撃西じゃ。乱破が見張を搔い潜って伝えてこそ、東声となる」

ぴしり。股間への二発目。乳房への打ち込みよりは軽いのだが、女淫の奥まで抉られる痛みは、はるかに強い。またしても女郎花の口から嘔み殺した悲鳴が漏れた。

一座の不始末は一座で拭おうとして、かえって寄り方の はかりごと 謀 を妨げてしまった。

利用されたことについては、腹も立たない。人の生き死に、家の栄枯盛衰がかかった合戦に、正々堂々も卑怯もない。ただ——そのような殺伐を嫌って、むしろ男どもを手玉にとつてくれようとしていた女郎花としては、またも男の掌の上で転がされたという無念は残った。

「一気に城を落とす計略が、おまえがでしゃばったが為に水泡に帰した。罪は償ってもら  
うぞ」

「如何様にも御成敗してください。されど、余の者に罪はありません」

女郎とはいえ、陣を借りているからには大将の下知に従わねばならない。なにより、御陣女郎は戦い手ではないにしても陣働きを務めてもいた。それは首実檢に端的に表われている。討ち取られた首級の汚れを洗い髪を梳いてやるのは御陣女郎の役目だった。だからこそ、御陣女郎はそのための櫛を二枚目として髪に差している。

#### 注記

二枚櫛については、隆慶一郎著『吉原御免状』を参考にしています。

兵が大将の采配を妨げれば、知らずにしでかしたとしても、その場で討伐されて当然だった。だから、女郎花は死まで覚悟した。

しかし茂親は、太刀ではなく縄を手にした。付言しておけば、縄は必須の武具である。陣地を築くに欠かせないというだけでなく、捕虜を得たときに縛り上げるためである。

茂親も、その目的に縄を使った。

「そこへ直れ」

言いながら肩を押さえつけ、女郎花を跪かせる。律儀に背中で重ねたままにしている腕に、縄を巻く。

「縛るのですか。抗わぬというのに」

覚悟を疑われているようで、心外だった。

「敲くだけで赦すにせよ首を斬るにせよ、罪人を縛るのは当然であろう」

「……………」

茂親の言はもつともだった。しかし女郎花が黙したのは言い負かされたからではない。

腕を扼した縄が前へまわされて胸乳の下を縛っている。息ができないほどではないが、

苦しい。縄の毛羽が肌に擦れて、くすぐったさと鋭い痛みとが縋交ぜになった感触が――

薊と椿と桜と、三人から同時に愛撫されているような錯覚を生じさせていた。

無論、しなやかな指と硬い縄とはまったく肌触りが異なる。あわあわとした指の動き



と縄が武骨に肌を擦る刺激も、同じくするところはない。それなのに——乳房の裡が粟立ち、腰の奥がじんわりと熱くなってくる。

(え……?)

縄が乳房の上を巻いた。動きを封じるには不要の縄掛けだ。しかし……身裡に揺れる戦慄は、いつそう激しさを増した。

茂親が二本目の縄を、これは首に掛けた。左右の縄尻を前に垂らして乳房のささやかな谷間に通し、乳房の上下を巻く縄をひとまとめに絞った。胸元で結び留めた縄を再び左右に分けて二の腕を縛り、腋の下を潜らせて上下の胸縄をいつそう引き絞った。乳房が上下左右から絞り出されて毬のように膨らんだ。乳首など、縄掛けされる前よりは一寸ほども突き出していた。

これほどに乳房を虐められて、鈍い痛みには呻吟してはいるのだが……胸といわず背筋といわず上半身全体が戦慄に震え、腰の奥がねじくられるように疼く。潤ってくる感覚こそ

ないが、熱い。

女を甚振るための縄掛け。戦国武将には不要な術である。それが、このように巧みだとはどういう意味があるのか——女郎花がそれに気づくのは、後の話である。

「ずいぶんと神妙にしておるな。いや……蕩けた顔をしておる。まさかに、縄が心地好いのか」

「莫迦な」

咄嗟に打ち消したものの、それが嘘と本人には知れている。

「これまで抗わなかったは、妾わらわの気儘じゃ。朋輩の命を顧みなくば、この場から逃げることさえ出来た。じゃが、このように縛されては、もはや何も出来ぬ。それが口惜しい」  
それは嘘ではなかったが、言い訳だった。

「ふふん。ならば、いつそう何も出来ぬようにしてやろう」

茂親が次の縄を取りに立ち上がって、壁際で地蔵のように突っ立っている足軽頭に目を向けた。見物しているのと命じたのを忘れていたとしたら、この男も相当に夢中になっていたわけではある。

「もう良い、行け。妓どもには構わずともよい」

おのが手で緊縛した女郎花を見下ろして付け加える。

「この妓がおとなしくしている限りは、な」

足軽頭が去って、小屋には茂親と女郎花の二人きり。茂親が腰を据えて、獲物を甚振りにかかった。

「まずは、立って逃げられぬようにしてくれる」

跪いている女郎花を、簀子を敷いて作った床に座らせる。すこしでも見苦しくない（男にとっては見楽しいのだが）ようにと膝を揃えようとするのを、足で蹴り手でつかんで胡座を組ませる。膝頭を足で床に押しつけ、腕と同じように真横に開いた脛を、重ねて縛っ

た。

「くうう……」

無理強いに開かされた股関節に痛みが奔って、女郎花が呻く。

「さて……これで、明朝から始める仕置まで、逃げられる怖れはなくなったわい」

もしかして、手籠めにされて、それで赦してもらえないのではなにかと——死を覚悟する一方で、そんな甘いことを心の片隅で考えていなくもなかったが。朝を待つてということ  
は、兵と妓を集めての見世締であろう。

しかし、そんな先のことを心配する裕りなど、今の女郎花には無かった。素裸で大股を開かされては、股間を隠しようもない。どころか、熟れた木通のごとく、淫裂までぱっくりと開いている。小屋の中は火皿の灯明ひとつきりで、満月夜の戸外よりも暗い。しかし炎に揺れる陰影が、なんとも羞ずかしい。これも男の目には妖しくも艶めいているのだとは、女郎花の慮外ではあった。

「夜討ちの心算であったから、目は冴えに冴えておる。どうじゃ、しばらく儂と遊ばぬか」  
縛っておいて、遊ばぬかもあったものか。

「わたくしは身体は売りません」

茂親を見上げて、女郎花は乾いた声で撥ね付けた。が、すぐに目を伏せて、弱々しく言い足した。

「このように身動き取れぬ身。お好きなようにお騷りになればよろしいでしょうに」

それはその通りなのだが。なにゆえ何故にそのようなことをわざわざ言ってしまったのか——言

った当人にも己れの心が不可解だった。

茂親は驚くふうもなく、ただ薄く嗤っただけだった。

「遊女の長であるにもかかわらず、生娘だというな」

「な……」

隠しはしていないが、喧伝した覚えもない。

「寝物語に相手を探るは、遊女ばかりではないぞ」

もしもこの男が自分と同じように、誰彼から寝物語を聞き集めているなら——いや大丈夫と、女郎花はひとつ文字の二人に信を置いた。己れの素性までは知られていないだろう。この男にとっては価値もなからうが。

「子を成すのが厭か？」

「当たり前です」

いまだに腰の奥にわだかまる熾火に尻をもじつかせながら、しかしきっぱりと答えた。

「この乱世に生を得れば、辛く苦しいことばかり。男であれば殺し合うか奪い合う。女であれば虐げられ奪われ犯され殺されるだけ」

それが真まことの理由ではないのだが、みずから素性を明かすつもりなどない。

茂親としても、子を産みたくないという女郎花に女の道を諭すつもりなど無い。駆け引きの方便だった。

「ならば、子を作らずに済ませてやってもよい」

言葉とは裏腹に、鎧下を脱ぎ下帯までも取った。陽物は、すぐにでも突貫できるまでに滾り勃っている。

その筒先を女郎花の唇に押しつけた。女郎花は顔を後ろへ逃げたが、茂親は敢えて追わない。

「精を放てば男は萎えると知っておろう。その口で精を吸い取れば、子を作らずとも済むぞ」

生娘ではあっても、耳年増目年増であれば、尺八を吹くくらいの性技は知っている——つもりだった。けれど、小水を垂れる所を口に啞えるなど、考えるだにおぞましい限りだった。それに比べれば男女の交わりは、言ってみれば小水を垂れる所が嵌まり合うのだから

ら、自然に思える。ひとつ文字の三人とどのように乳繰り合っていたかを忘れて、女郎花はそんなふうにした。

それに今さら——と思いかけて、はっと気づいた。茂親にしても、女郎花を殺すつもりなら、十月十日も先の話を持ち出さないのではなからうか。

そうなる。子を成さずに済む道があるのなら、そうするべきだと——女郎花は心を固めた。一度は顔をそらした物へ口を近づけた。

妓たちの娼売を日々間近に見ているとはいえ、獣じみた男の臭いを嗅ぐまでに顔を寄せるのは初めてのことだった。女郎花のそれを早苗とすれば刈り入れ時の稲穂ほどに密生した剛毛。その中に聳え立つ節樽立った大木。しかし、のっぺりした筒先は、ひとつ目小僧に似て案外と可愛い。といつても、たとえ手が自由であったとしても、頭を撫でてやろうなどとは決して思わないだろうけれど。

「眺めていても埒は明かんど」



茂親が女郎花の唐輪鬘をつかんで、ぐいと頭を押し下げた。

やむなく女郎花は口を開けて勃起を啜えた。

「ももお……」

目で見て思っていたよりも、ずっと太い。生温かく生臭い。

「んむむ……」

ぐいと喉の奥まで突き込まれて、吐き気に襲われた——のをこらえて、唇で竿にむしやぶりついた。妓たちが話していたあれこれを思い出して、頭を前後に揺すって竿をしごいた。さらに、舌を先端に這わせた。意想外に、きゅろんとした滑らかで弾力のある舌触りだった。

しかし、女郎花に出来るのはここまでだった。どこをどう舐めれば男が悦ぶか、啜えるだけでなく啜るとか甘噛みするとか——そういった具体的な技巧の知識まではなかった。

雁首が感悦の急所だとすら知らない。ただ竿に唇を押しつけて、頭を揺すり続けた。

それでも男にその気があれば、腰を遣つて上顎に擦り付けるとか頬で亀頭を刺激するか、いつそ女の口をただの穴に見立てて好き勝手に喉の奥まで犯すとか——いくら遣り用はあつただろうが。茂親は端から新鉢を割るつもりで、女郎花を辱しめ心を打ち砕くためだけに痴戯を強いたのだから、空を使つてでも埒は明けなかに決まっている。

五十文の線香なら半分ほど燃え尽きるだけの時を掛けてから——茂親が女郎花を突き飛ばした。

「あっ……」

後ろへ転びかけるのを、茂親が女郎花の重ねられた脛を踏んで引き戻した。

「ええい、埒が明かぬわ。瓜を破わつてくれる。子を孕ませてやろうぞ」

脛を踏んだまま、手前に引き倒した。

膝と頭を床に着けて、尻を高々と突き上げた形。己れの姿を頭に描いて、女郎花は羞恥に悶える。

「こ、このような……」

もっこ禪を足軽頭に剥ぎ取られたときよりも鮮やかに、裸身一面に紅葉が散った。

後ろから一気に貫ける形に女郎花を据えて、背中におおいかぶさつて。しかし、茂親は事を急がない。縄で縊り出した双つの乳房をつかんで、愛撫ではなく握りつぶす。

「痛い……さつさと埒を明けてください」

うわはははと、茂親が嗤う。

「我からねだるか。淫乱な生娘もあつたものだ」

茂親は力を緩めて、あわあわと乳房を揉み始めた。さらには、乳首を摘まんで指の腹に転がす。

この一年余。日々とまではいわぬにしても十日と明けず、三人の妓たちと戯れ合つてき

た女郎花である。じゅうぶんに性感は花開いている。男の手で弄ばれるのは初めてだが、その乱暴な愛撫にさえも応えてしまう。

「くう……痛い……痛い。もそつとやさしゅうに……」

もじもじと蠢く尻から覗き見える木通に露が宿る。

「ふふ。女ばかりの卍巴で、すっかり熟れておるのう」

左手は乳房を揉みながら、右手が木通をくじる。

「ああ……実核を……」

弄ってほしいと言いかけて、あわてて口をつぐんだが遅かった。

「ここか？」

木通の突端の蕾をくにゅんと摘ままれて、女郎花の尻が跳ねた。

「ひゃんっ……」

がさつな太い男の指。女のしなやかな細い指とは格別の、雷に打たれたような衝撃だつ

た。

しかも太い指は意想外に器用だった。包皮を剥き下げ実核を露わにして、指の腹で転がす。

「ひゃああつ……んんん」

甘い悲鳴が、いつそう甘く鼻に抜けた。

「そうじゃ。いつそのこと……」

茂親の右手が滑って、木通のすぐ後ろに潜んでいる菊の蕾をつついた。

「あつ……そこは……」

もつとも不浄な部分をこねくられて、女郎花は狼狽した。

「ここで媾合ってやろうか。されば子を孕む気遣いはないぞ。男と女で衆道の真似事というのも、風情が……ん？」

菊の蕾を蹴る指の動きが激しくなった。

「や、やめて……駄目……くううう」

そこもまた、前人未到ではなかった。女よりも太く硬い指を呑み込むように蕾がひくつく。

「ふうむ？」

茂親は指を止めて暫時思案すると。

「よかろう。どこまで淫乱か見定めてくれるわ」

体を起こすと、胡坐に組ませている縄をほどいた。ごろりと仰臥する。怒張だけが屹立していた。

「おまえが上になれ。儂にまたがって、己れの手……は、使えぬな。己れの腰で、儂を啗えてみる」

「……………」

女郎花は足を伸ばしてうつ伏せになり、横へ転がってから身体を起こした。茂親の言葉

は、悔しいが理解できる。そのような形も存分に見ている。

「どうした。男を馬に見立てるなど、女郎にとっては朝飯前であろう。その形で、みずから瓜を破ってみよ」